

5. 「かな書き」方式にはこんな欠陥がある

かな書き方式の失敗

初めて一年生の担任になって三年後、私は再び一年生を受持ちました。今度は、三年間の指導経験を積んでいるの

で、一年生の扱い方もよく解り、自信をもって子供たちを導くことが出来ました。それに、前回よりも幸いだったことは、校舎が増築され、二部授業がなくなったことでした。授業時間数も、前回に比べると、二倍近く増えました。条件は、あらゆる点で、前回より良くなっていました。しかし、結果は逆に悪かったのです。

それは、漢字の覚え方が悪かったというだけのことではありませんでした。もちろん、覚えた漢字の数も少なかったのですが、それよりなにより驚いたことは、「あるけ」式指導法には、今までだれも気が付かなかった、致命的な欠陥があったということです。

私が指導主事をしていた頃、先生方から、

「テストすれば書ける漢字が、作文にはなかなか使われない。これはなぜだろうか。また、この指導はどうしたら良いだろうか」

という相談をよく受けたものです。私は、この原因は、


「漢字は画数が多くて、書くのに面倒だから、知っていてもわざと使わないのだろう」

くらいに考え、そう答えていました。しかし、事実はそうではなかったのです。


なぜかと言いますと、「歩け」式の時には子供たちは、一度習った漢字は、作文の時はもちろん、どんな学科の学習の時にも、必ずこれを使って書いたのです。忘れてしまって書けない時には、必ず質問

コ ラ ム

部首 喬

天と高との合字。天は  で、頭の曲った人の象形。従って喬は、高くそびえて、上の方の曲っていることを表した部首。

【橋】 真ん中が高く、そり返った形(アーチ形)の“たいこ橋”が本義。力学的に丈夫なので昔からこの形の橋が多い。今では形と材料に関係なく使われる。

【高】  で、高い建物の象形により“たかい”ことを表した指事字。

して教えてもらい、かな書きすることは、決してなかったのです。

それは、「橋・箸・端」というように、発音に関係なく、言葉には決った一つの書き方があって、そう書かなければならないものと、子供たちが皆そう考えていたためだと思います。極端に言えば、「橋・箸・端」を「はし」という書き方をしたのでは意味の区別が付かないように、「山は、『やま』と書いたのでは、山の意味を表すことは出来ない」と、子供たちは考えていたのではないか、というように思われました。

だから、まだ教わらない言葉を使う時でも、それをかなで書いて済ませる、ということをせずに、どう書くか、ということを必ず尋ねたものです。

漢字の本当の力は、使うことによって付くものです。「歩け」式指導方式が、すばらしい成果を上げたのは、このためだと思います。また、文部省(現文部科学省)の目標の七倍もの漢字を覚えたということは、大変なことのようにですが、よく考えてみれば、実に当り前のことだったのでした。

「歩け」式では、言葉を、言葉の持つ意味をしっかりと押さえてから、それを書かなければなりません。これは、ちょっと考えてみますと、大

変なことのように思われますが、書くという仕事には、それだけの注意は絶対に必要なものなのです。これを怠っていたのでは、本当の国語の力、物事を考える力は付かないのです。しかも、それは、最初に注意さえすれば、すぐにその習慣が付きますので、心配するほど大変なことでは決してありません。

能力より習慣が問題

漢字の力は、ある意味では、習慣の問題で、能力の問題ではありません。

よく知っている漢字でも、使わないでいれば、そのうちにこれを忘れてしまうでしょう。それにひきかえ、漢字を知らなくても、教わってでも漢字を使って書こうとする子供は、必ずその漢字を覚えることができます。

漢字の力は、どんな能力のある子供でも、漢字を使って書こうとする習慣がなければ、絶対に付きません。これに反して、どんなに能力の低い子供でも、漢字を使って書こうとする習慣があれば、その力は必ず付くものです。

「歩け」式学習方式は、だれでも、漢字を使って書く習慣を、きっと

付けることの出来る方式です。この方式で勉強する子供たちは、

「漢字を使って書きなさい」

などという注意を受けなくても、必ず漢字を使って書くからです。

「あるけ」式学習方式では、先生が、どんなに口をすっぱくして、

「漢字を使って書きなさい」

と注意しても、子供には、漢字を使って書こうという習慣は付きません。

私が先ほど、「あるけ」式学習方式には、致命的な欠陥がある、と言ったのは、これなのです。今まで、どこの学校の、どの先生でも、

「子供たちは、知っている漢字を使わない」

と嘆いています。その理由は、漢字の字形が複雑だからだ、と思っています。ですから、これはどうにもならない、いわば宿命的なもの、という風に諦めてしまっています。

私も、「歩け」式と「あるけ」式と、この二つの方式をやるまでには、やはりそう思っていました。けれども、「歩け」式をやり、その上、「あるけ」式をやってみて、その結果があまりにも違うので、本当の理由が解ったのです。

簡単でない正しい使い方指導

私の指導主事時代、先生方から相談を受けた問題に、もう一つ、

「『火と(人)が木(来)ました』というような書き方をする子供が非常に多いが、これをどのように導いたら良いのか」という問題がありました。これも、どこの学校の、どの先生もが嘆いている問題です。

この誤りの起る理由は、「漢字を、言葉として理解しないためである」と、一般に考えられています。ですから、「火」は、単なる「**ひ**」という音を表す字ではない。「燃える**ひ**」を表す字であって、「朝**ひ**」という場合には使えない字である、ということをよく理解させればよい……。このように考えられていました。指導主事時代の私は、いつもそのように答えておりました。

しかし、問題は、そんなに簡単なものではなかったのです。教師のそういう注意だけで、子供たちは、正しい漢字の使い方が出来るようになるものではありません。

これもやっぱり、根本的には、「あるけ」方式の生み出した欠陥だったのです。「歩け」方式の時には、何の注意を与えないでも、こんな誤った使い方をする子供は、全然ありませんでした。ところが「あるけ」方式では、「火は燃えるひで、それ以外には使えない字ですよ」

と、どんなにしていけないに教えても、一、二割の子供はやはり、間違った使い方をするのです。

初めから漢字で学べば間違えない

両者の結果がこうも違ってきますと、原因は、やっぱり「歩け」方式と「ある

け」方式そのものの違いにあると考えないわけにはいかなくなります。

そこでよくよく考えてみますと、やっぱり、ありました。実にはっきりとした理由があったのです。

「歩け」方式では、「火・日・人……」言葉の一つ一つに当て、その言葉固有の書き表し方を学んでいきます。子供たちは、一番初めから、そういう書き方をちゃんと学んで、文字というものはそういうものだということを、最初から理解してしまいます。しかも、「火・日・人…

…」など、すべての言葉を、初めから漢字で学んで知っているのですから、間違っ使用、というわけがありません。

ところが、「あるけ」方式では、初めは、どんな言葉でも、かなで学習します。だから、子供たちは、なんでもかな書きする習慣が、出来上ってしまいます。

それでいて、次に、「木」という字を学ぶと、「うえ木(植え木)」「つみ木(積み木)」と書かなければなりません。けれども「てん木(天気)」「木しゃ(汽車)」と書かなければいけないのか、それともそう書いてはいけないのか、ということになると、一年生の子供たちには、この区別はなかなか付かないのです。

コラム

部首 半

“物”という意味の牛と八(分かつという意味の部首)との会意形声字。“物を真二つに分ける”こと。

【判】 “リ(かたな)で切って半分にする”こと。昔、証書の類は二つに切ってその一つをそれぞれが保管し、二つが合うのを証拠とした。“真偽を判別する”という意味の“わかつ”こと。

子供たちは、「つみき」と書いて、「つみ木」と先生に直されます。そこで今度は、「きしゃ」と書かないで、「木しゃ」と書きます。すると、今度は、「きしゃ」と直されます。頭の良い子には、どうして直されたか解るかもしれませんが、けれども、普通の一年生の子供には、これではどうしたらいいのか、迷ってしまうのが当たり前です。

私は「あるけ」方式をやってみて、教わった漢字を正しく使うということが、一年生にとってはどんなに難しいことか、初めてよく解りました。これでは一年生はかわいそうです。実に難しい、それでいてちっとも効きめのない勉強を、子供たちはやらされているのです。

外国の教え方に学べ

こうして私は、「やっぱり『歩け』方式でなければいけない」と思いました。「積み木、天気、汽車……」初めから、こういう

形で教えてさえいれば、「てん木」とか、「木しゃ」とか書く子は出て来ないので。

英語でも、初めから、「night, knight, write, right」と、区別して教えています。「nait, rait」とは教えません。これは、世界中、どこの国でもや

っている文字の教え方の正道です。ただ日本だけが、初めに正しい書き方を教えないで、子供用の(にせの)書き方を教えているのです。「人のふり見て、わがふり直せ」という諺があります。しかし、それが正しいやり方であるなら、外国でどうやっていようと、自信を待って、独りわが道を歩いて行くべきです。しかし、わが国の今のやり方は、わが国だけのものであって、しかも、どうも間違っているようです。いや、私の実験は、はっきりと間違っていることを証明しています。

コラム

部首 每

𠂔 (𠂔 = 艹) と母との会意形声字。母なる大地の恵みを受けて“草が生い茂る”こと。転じて物事の“重なる”“重ねる”意味。

【海】 ^{かいめい} 晦冥 (日が草に隠れて“くらい”) の意味の每と水との会意形声字。“海は深くて暗い”ので「溟」とも。

【悔】 ^{かいめい} 晦冥の每と心との会意形声字。ああ残念なことをしたと、うらめしく思って“心がくらい”こと。